夜蝶

Pinky..

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜蝶

【Ｎコード】
Ｎ０４９８Ｈ

【作者名】
Ｐｉｎｋｙ．．

【あらすじ】
彼女は夜蝶。私は花蝶。太陽と月のような私たち、、私が体験し、私が感じ、私が過ごした、懐かしき日々。危険で、切なくて、苦しくて、それでも愛しいあの時間。

～序章～（前書き）

私が体験し、私が感じ、私が過ごした、懐かしき日々。
危険で、切なくて、苦しくて、それでも愛しいあの時間。
これはノンフィクションです。

～序章～

そうね、あなたとわたしは違う。

いつからだろう？そう思ったのは・・・・

日の光の中で生きる私には、あなたは艶やかすぎる。
夜の闇の中で生きるあなたには、私はまぶしすぎる。

あなたと私は対象で、太陽と月。
でもそんなに美しく大きくないね。
でもそんなに近くないね。
もっともっと遠いよね・・・・。

それでも惹かれ合うのはどうして？

～序章～（後書き）

まだまだ未熟な文章ですが、皆様、評価よろしくお願いします。

～第1章、出会い～

私は福原　歩。ごく普通の公立中学校へ通う中学2年生。
可愛いかどうかと言えばよく言って中の上だ。
スポーツは出来るほうだ。バレー部にも所属しているし
体育は努力しなくても5をとれる。

一目おかれる点といえば、成績がいいこと。
技術家庭科を除けばオール5だった。

性格ははっきり言って悪いと思う。
他人は他人で関係ないし、自分さえ良ければいい。
冷めている。気が強く。プライドも高い。

でも、だからといって勉強ばかりしている
ガリ勉ではない。正味、そこらへんの人より
遊んでいるような気もする。

それは夜蝶、加藤　葵の存在があるから。
可愛い顔立ちで、スポーツも出来る。
やんちゃで勉強なんてしない。
けれど、友達思いで性格の良い子だった。
そして、私と同じく気が強かった。
夜蝶といっても別に、お水の仕事をしているワケでもない。
私からみた彼女のイメージが夜蝶なのだ。
私とは違う世界で生きるきらびやかな蝶。
その時の私にはそう見えたのだ。

今から丁度1年前。
私たちは出会った。

私たちの出会いは、中学の部活動だ。
ふたりともバレー部で1年生から一緒に練習している。

その時、私は彼女が嫌いだった。
不真面目で、馬鹿で、やんちゃな彼女を見下していた。
私は中学生にしては大人な考え方というか、冷めていた。
だから中学は高校へ行くための手段であって、
それ以外の何物でもないと考えていた。
今が良ければいい、という彼女の考え方は
世の中で最も馬鹿な考えであって、先を見据えて考えることこそが
世の中で最も利口な考え方だと思っていた。
誰に教わったわけでもない。
本当にそう思っていたのだ。

互いに気の強い私たちは、当然、クラブで対立した。

私はひとり孤立し、葵の周りにはみんなが居た。

けれども私は辛くなかった。クラブをしているのも高校へ行く
内申書を良くするためであって、周りがどう思おうと関係ないのだ。
感情を無くした人間。ロボットのような私には痛みがなかった。

～第2章、トモダチ～

痛みを感じなかったと言えば嘘なのかもしれない。
本当はとてつもない痛みを感じていたのかもしれない。
私の場合はその痛みを感じないように、全てをシャットアウトしていたのだと思う。きっとそうだ。

だから私はどんどん上達していった。
他の人に負けないようにどんどん練習した。
けれど葵にはかなわなかった。
そして、やっぱり私の周りではなく、
彼女の周りに人はいた。

月日がたって、私達のポジションが決まった。
私はセッター。まあ背が低いからアタッカーにならないことは確実だったし、何よりも先生は私の頭をかっていた。
だからセッターなのだろう。

葵はエースアタッカーだった。
そしてキャプテンだった。
当然の結果だったと思う。

私達はそれぞれのポジションを気にいっていた。
辛いけどやりがいを感じていた。

けれど、一番協力しなければならない
セッターとエースなのに、私達はあまりにも遠かった。

当然息も合わないし、会話もない。

私はそれで別にいいと思っていた。
内申書に
「3年間女子バレーボール部でセッターとして活動していた。」
という、一行が欲しいだけなのだから。
クラブでベスト○位などはある程度の結果でないと
載らないが、スポーツで高校を決めるつもりは
無かったので、それでよかった。

でも彼女はそうでは無かったようだ。
それとなく私に声をかけてくるのだ。
別に来るものを拒む必要もないし、対立が
無くなるのがデメリットになるわけでもない。
だから私は受け入れた。

いつしか、私達のチームはどこにでもある
クラブになっていた。勝ちにこだわり、毎日練習をし
汗を流す、純粋なチームになっていた。

私と彼女はいわゆるトモダチになっていた。

けれども私の心は冷めたままだった。
人のことは考えないし、顧問の言うことも
別にどうでもよかった。

それが彼女にとっては怒りに触れる行為だったらしい。
トモダチとして許せなかったのだろう。

私達はまた対立した。

けれども今度は様子が違う。
人はどうでもいいと考える私が、彼女になにか言われる度にミスをするのだ。トスもサーブも、全部全部。

別にサボっているワケでもないのに、
下手になっていくのだ。

周りとの距離もどんどん広がっていく。
チームの結束は私を抜きにしてどんどん強くなっていく。

あの時とは違う。

本当に離れるとはこういうことなのだ。
単なる子供の対立なんて、どうってことはない。
けれどもこれは違うのだ。

いじめでも、はみられているわけでもない。
仲間と認識されていないわけでもない。
同じチームだ。けれども、私は違うのだ。

何かが他と違うのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0498h/

夜蝶

2010年10月9日03時16分発行